



宮川夜話

五

ル 4
1169
5



1169
5



吉川夜話卷之五目錄

古物類 十八條

所政印

秘記

竹葉禮記

行成河佛尼書

保元軍車軸

光明寺殘編

聖海總錄

世室鸚鵡杖

旧家古文書

天國古刀

秀卿佩刀

義朝佩刀

鶴ノ凡

清盛薙刀

信玄佩刀

朝霧古刀

平氏軍旗

河津琴村雨

古墳類 七條

大五輪

永泉式部墓

結城入道墓

福原右馬助差 秋田御成臺 二見、古墳
面塚

土産部 五十種

附録

奇異雜話 十餘條

吉川表活州卷之五

古物部

印政部

大官司家と兩神宮小侍の印政印の朝廷と
下へ至るへ、重今川小全等が、大官司家の所
花ハ舟衝二年内宮ハ天平五年外宮ハ貞觀五年
小朝廷小藩とせり、之を神宮とて奉同の款
状ハ大官司及長官家とて此印を押し、秘せ
らるゝ、此例、外宮宮中ハ印政印の印舎とい
ふあり、是とて、此の秘、此の印、此の印の事也

他の指ささるる所は是より用ひ。今云に内より外言
官地の異なり、所由は未工と天皇穂井の和の詞
の用法例より中内言なりとあるは此式者なり
と妻——同信あり

秘記

外言より十二部、秘記あり、内五部と要し、内言
方是を偽書なりと云ふは、然るも内言なりと云ふ
は、傳ふる所なきなり、伊難玄沙法文の附内言
才に秘記と引用ひ、能く利益を得るなり、今
之偽書なりと云ふ又く愚なり、己はあやまり、賢

なりと傳ふなり、
此は金永十より、其是書小

に秘書佛法あり、いふ翻語あり、用ひ、小なりと

いふ、この時世と異なり、

妄法あり、今の人も、能く、後、天皇は、謀叛の事

結構上、種入、此秘書、墮つ、の類と、名、法、と、

今の書、秘書あり、と、正威、身、自、の、忠、烈、勇、弟、と

え、つ、小、と、持、て、小、需、む、は、き、も、ぬ、ち、き、り、如、

言と、他、と、い、ひ、規、矩、準、繩、と、傳、つ、り、彼、古、書

は、さ、さ、く、不、文、教、信、の、深、難、あり、中、或、神、言、の、秘

書きつゝ石重遠及井澤長秀曰伊勢の秘記と
言耶幸是の事と延佳神主曰不文錯簡重儀の歌
あつたや古書の體なれと莫小也と

竹葉禮記試み教書と

周の世の御時一布と仰りて章^{オシカハ}とて史^{オシカハ}の如く
編む書籍とて^ナ初小竹巻とて^ナ千竹とむとの
たまひ支と仰りて^ナ大^ナとて^ナ様^ナと云と^ナ教書
と^ナ以上上古日本へ^ナ海^ナと^ナ禮記^ナ根^ナ恒^ナお^ナ監^ナ家^ナ山^ナ田^ナ
^ナ原^ナ小^ナ所^ナ花^ナと^ナが^ナ寛^ナ文^ナの^ナ寸^ナ所^ナ小^ナ焼^ナ考^ナと^ナ是^ナと^ナ是^ナ
一^ナ老^ナ人^ナ傳^ナへ^ナて^ナを^ナ奇^ナと^ナ語^ナと^ナ其^ナ不^ナ信^ナ家^ナ小^ナ傳^ナへ^ナて^ナ

秘書記録数多庫中よりて送るは佳土と申及

日本力の歌小古典日本小傳へて中華小海と

可^ナ知^ナ評^ナと^ナは^ナと^ナも^ナは^ナ教^ナと^ナ一^ナ傳^ナ

行成々所傳尾書

久志本武部家より所々の調録集所傳尾の八代
集伊勢物語と傳へて^ナ武^ナ部^ナ医^ナ官^ナた^ナと^ナ後^ナ生^ナ武^ナ
小^ナ所^ナ花^ナあり^ナ初^ナ年^ナ至^ナ州^ナ信^ナ侶^ナ君^ナと^ナ初^ナ結^ナて^ナ親^ナり^ナれ
ハ^ナ此^ナ書^ナ中^ナに^ナ家^ナ富^ナと^ナ納^ナり^ナて^ナ韓^ナ樵^ナ二^ナ名^ナと^ナ室^ナ花^ナ小^ナ
初^ナり^ナて^ナ一^ナの^ナ懸^ナ命^ナ燕^ナ止^ナと^ナ初^ナけ^ナお^ナき^ナな^ナは^ナ倉
庫^ナハ^ナ壁^ナと^ナ二^ナ重^ナ小^ナの^ナま^ナへ^ナ一^ナ重^ナハ^ナ焼^ナと^ナも^ナ内^ナに^ナ

一重ハヨリテ慶重ナル侍ナリ哉時ナルノ形或
時ノ才若小達ノヲ疑フコトナリ

保元軍要録

福高由佐佐木氏由八日市場町幸家齋所之土佐
光信ノ輩ノ一ノ彩毛美ト云ノ人物其小通ト云
之頃有徳大君の命有之依テ上流ノ侍ト云

光明寺残編

信隆上野入道ノ自筆軍中ノ日記勅制軍法ノ標
額ト云々世水戸黄門光圓台ノ一ノ一ノ一ノ一
考考右平紀小切勢光昭ノ侍残編小ノ一ノ一ノ一

たまに此書を教者一と惜しむ一我の任信友古
ふと一残りのこと

平信延任神主の改正と改柳とのこと其書に水
戸信も他二尺と右酒一樽と謝儀と云々

平河信録

此書宋徽宗皇帝手月編集の医書全部二百巻法
方二万才書是ノヲ詳書ナリハカクノ一ノ一ノ一
小板減して此書奔水日市小案板ニ部あり一
部ハ半井成一部ハ久志本家の重宝教録の才矣

と道と今もあはれと夫きのうはなれはあはれ
腐しては補ふ如く今一部を薩州に有るや

世宝鸚鵡狀

此書世宗^ハ忠^ハ西^ハの秘書^ハして全部百卷寛文は
頃ハ家^ハの一代盛徴^ハといふ人^ハ執筆^ハして今市本
の類まゝあるを其^ハ教書^ハと編述^ハしてこの鸚鵡狀^ハ
古語の體^ハとなし和歌と巻止^ハなるを例^ハと記^ハ
して至^ハ終^ハと終^ハして竹^ハ小^ハ及^ハんて全書^ハなりとて
馬丸^ハ光宗^ハは^ハ信^ハ宗^ハより^ハて^ハ長^ハ於^ハく^ハ村^ハ集^ハを^ハ一^ハと^ハ書^ハ
元帝^ハの^ハ敵^ハ攻^ハふ^ハ傍^ハり^ハて^ハと^ハ世^ハ品^ハを^ハ以^ハて^ハ敵^ハ感^ハと^ハて

其^ハ世^ハは^ハ至^ハ宝^ハなり^ハて^ハ信^ハ宗^ハより^ハて^ハ長^ハ於^ハく^ハ村^ハ集^ハを^ハ一^ハと^ハ書^ハ
寶^ハと^ハ冠^ハなり^ハて^ハ也

旧家古文書

永^ハ治^ハ渡^ハ戸^ハ田^ハ之^ハ夏

合群杖

在^ハ宇^ハ治^ハ御^ハ麻^ハ海^ハ村^ハ者^ハ奈^ハ里^ハ坪^ハ舟^ハ文^ハ書^ハ面^ハ具^ハ也

直理米二石餘三百請納畢

右^ハ得^ハ田^ハ自^ハ本^ハ領^ハ主^ハ荒^ハ本^ハ田^ハ忠^ハ茂^ハ之^ハ手^ハ相^ハ副^ハ論^ハ文^ハ等^ハ永^ハ
所^ハ買^ハ得^ハ也^ハ敷^ハ免^ハ他^ハ妨^ハ長^ハ依^ハ有^ハ直^ハ要^ハ用^ハ相^ハ副^ハ本^ハ文^ハ書^ハ等^ハ
永^ハ年^ハ治^ハ海^ハ干^ハ僧^ハ陸^ハ内^ハ也^ハ後^ハ代^ハ更^ハ不^ハ可^ハ有^ハ他^ハ妨^ハ仍^ハ能^ハ文

以詳

寛永二年三月八日

大法師能倉 勿

右古文書ハ武百部下付ノ一ノ中田地ノ麻海村
明光寺ノ侍ノ今ノ寺領ノ中ニ
倉田右史ノ家ノ山田西ノ岡秀吉ノ朝鮮陣ノ時
ノ通リノ形ノ一ノ一ノ所ノ浦ノ船ノ行ノ名ノ
倉上杉宗勝ノ判あり

由師倉田右史上下三人跡本一市と持

通系江右道ノ長通者也 郡ノ人名と

此倉田右史ハ今ノ上杉家ノ由師前ハ云此此川
社造惣ノ系法をすせし例ありを旧家形と

龍女某 山田大前 家ノ作ノ本盛信ノ書礼ノ一ノ一ノ

のり子

河井家 山田大前 家ノ推任日向守山勝合我利違ふ

ありてハ右ノ神系と勅ノ一ノ一ノ形書ノ自余

ナリト一ノ一ノ河井家ノ叙爵家我姓既ノ七ノ

余年ノ旧家ナリ龍家ノ異姓ト一ノ一ノ譜家ナリ

古文書ノ款旧家ノハ教ノ所也一ノ一ノ悉ク奉記ノ

河上ノ

天國右刀

山田大治家の重宝なり九州石原郷より奉納
し来由あり〜〜付く〜〜田原守の家宝あり〜〜
花と

秀郷佩刀

中少左儀藤右形を深井平右史 山田一と奉納付
へてをら後右徳大君の上流小侍を以製古外
ふ〜〜奇形を譲り入中包と奉り〜〜先た〜〜の
赤ら〜〜小むわ〜〜元ハ河州の徳士赤松某と
りや〜〜人の奉納〜〜の来由明白なり次ふ

以〜〜第形の右刀と共小研刀研小舎と〜〜在哉
小あり〜〜其真を認め〜〜

義朝佩刀

形態岳の村物語に 祐常國助包地と銘あり其
法右刀と共小上流小侍〜〜真小形を白鞘と〜
〜古物の傍ハ別小なり〜〜付〜〜以〜〜薬痕並
同包ハ祖を第形の後者〜〜義朝滅亡の後この
右刀を授へ来〜〜又在岳藤倉〜〜持来あり
〜〜以〜〜智徳大君紀勢小由流〜〜神形小あり
付〜〜ハ小見〜〜の奇物語〜〜志保〜〜老〜〜あり〜

上段の石倉ありし

新の丸

出口信濃山田河延家小侍を播州赤穂城主
森家の祖より奉納ありし劍保年の初小奇兵を
侍へ新泉苑より新の丸を贈りし事あり
号しとて一たひ中平小ありし事新泉苑に
しるしありし事新泉十下小新の丸吹丸と云
たり

清盛公薙刀

堀長熊を丈山田河延下家より侍へ清盛公は師たりし

由緒ありしなりし事新泉より侍へ其形のしるし
目録

信玄佩刀

幸福出雲家山田河延ハ武田家の法師長勝庵
より一代ハ信玄の尹と甲斐玉土師家未倉家
等ハ法師なりし佩刀長二尺六寸昔年と云あり
寛文の古書ありし灰燼の中より探りし事あり
今も遺りし事ありし馬具書札の類ありし事
ありし事

朝霧古刀

平氏軍旗

志州島羽領五多村より生留と集うて塗抹
楯の紋神号之行平勢法不明なり其の楯之松
平源河内兼色名後日志中左をの家長平源兼六
ととて其奇形なり取而もあつたなり其
神の社乃ち備わつて合さるる一々壽永文法
此年間平族より小落果てて其系を断絶せり
傳へる者散見あり

此村の辺源と里とあり山里より他
の人要月なりされにけり其地より其

軍の落人源と在たり一は其軍旗も在
末より極小柄一時ハハ一平ともなり其
柄より其源氣小柄と破腐とあり一は口軍
者曰大和國吉野郡和田村氏家の保利乳舟旗
は号と養命とあり而も其地は源の紋ハ
赤遠神号ハ信あり一は社なり

江原孫村南琵琶

志州島羽領五多村より一の琴江源とあり
ハ元老土井大炊君の家より出たり土井國重の
妻女土井利長秘藏とあり七室とあり江原

と云き然しそは女性早世の後けち小送子竹物
と云きしつて傳へ云平重衡鎌倉にて頼朝の志と
と侍女子手ちつとへ重衡と應了たれ用ひ
一琴なりとと土井君高揚とて肥の座は小福と
り一後けち法華宗とて土家となく終ふ廢ちせ
一かひは名帯もつとらへるまじしとつと
あしつと法雲流の竹物小村南の琵琶とつと
此ハ暫々時の秘蔵なりと村南と詠ありと手
畧の字傳と誤るお菊と琵琶と唱へて是とをま
以散るして尾の名を伝ふあつと終つと

古墳歌

大五輪

尾上山は京市権平坂の北もあそ 権平の坂名本
村の里なり
千口とつとあかけし 一は盤石方四人地とて頂
の多き一と余傳説古今のちかひ一説は出小
和泉ちあそては石怪ハ和泉武部所とつと又
信具正光昭皇依りてそ小建とつと今現小
そと安新とつと文字の形とつと一は杖橋別は新橋
とつと出さミカケ石とつとつと一は五輪五輪とつと
とまきまきとつとあつとつと

武日を世宇活山日輝ひ有るにけは辺新橋水
且ハ具嶺山の衣送るに其時死すと一喜魂と
まつりて為ふ汲けしものこけ小西河東の旧
家しを毎七月灯籠とて向ふとてけは旧衣を以
てけはけ家しをけは今瘧疾の形ひ小強ありと
て信する者ありて其を建任連使とてしとて
好みの有る水とて

和泉式部墓

山田吹上町完成寺所在しとて其山末に宅地
ありて家元を天明とて由緒をけは山名其山

小住居し即家名とてけは墳を汲けし藤原保
昌の裔なりとありて其先明とて其小引橋とて其
是とて後とてけは在田し其山小式部墳とてしと
けは四時之元とて葬地とてあり

結城上郡入道墓

常の墳小津且其古平紀とてけは常小新首とて
樂し地嶺小墾とて又とて其口考考とて伊勢山田
吹上とて其小所と十四日迄与痛し罹る其年七
旬年小宮内女補親朝結城奉國小親史とて其
常とて其小月彼和向ハ入道とて其小又とて其小

飯ありて〜川為りて冬春の寒涼より凡ハ番地
越ゆる形〜支那寺より〜流し四百年の形〜
前を計りて〜又より佐白河帝の陵〜碑を
一代の住僧寺堂の修造なり〜たより〜
〜北島孤家々の碑あり〜
字解あり

福原右馬助墓

相模村永松菴境内よりありて永長五年閏ノ月放軍
此時由師福田左史山田一志町下ノ森小落島
源より〜と因系は軍士より福田より森と森と因

正福田堅〜流防しれ〜も福も既小焼計より人
〜福田より怖生計〜密計〜福原を野懸
小退り〜先終小討死し及〜福原実終小恨人
下田〜長袖の徒形し小甲斐形〜は更前小去ふ
らさハ死を恨〜遠〜き小仍て去小也〜生〜
也〜此送恨なり〜自殺する〜家信二人も小
痛〜働き分骨を〜〜中は碑字より四人余
積二人評言あり〜文字より〜寺傍小丘
ふ下字より〜一任殿須積乃益禪定川濃州大垣城
之福原右馬助永長五年十月二日又心誓一諾長

士家臣神保長之又真得如孫在士家臣姓名不
記

秋田城衣墓

石口新之助其子其州之考は城主秋田家の祖之
國政不盡の罪に依て左近と云れ帶々磐石
立一々万治二年卒去なり其子春信と云れ
と寄り且洒掃と云れ其代事の時とありと云
其碑ハ五体五幅一々言乾院殿前侍従室藏
梁空大居士万治二年己亥十一月廿九日安臥矣
季の辰と記さる生か詠はる長一能書なり

其忠績の事一梁空

栢の侍小夕散るる栢の如竹つら生
て荒るる墙かきもいと其書きつら其おの
と獨りもよまよまひまのそれ侍と云れ
おの花と云れそのまひ一物と云れ
さひ出るとして讀侍

其水のこまの眉をかくる

梁空よふ歳年長ゆひ一や妻と其女の法を永
松庵の居士懐ふ又つら其を写

月峰晴桂臺女寛永十四年三月廿六日没十一
歳俗名河千又玄清院印良昌元禪定尼兼惠元
年壬辰十二月二日没持女

二見古墳

沙合北西川沿ふ二尺許の石造り墓人との石と
単人後とゆへそをき形也小高郷の長尾村単人
とゆへ人云小付形と一徳なりとゆへ彼村山武
別放軍の強黨二見小落集るとゆへとそ村の
かたてゆへとそ氣の國目と鳥好の端と九鬼氏
とけゆへとそ端とゆへとゆへ

平前と云山田系と沙合の間西の側小あり古
墳と見ゆりと得見も頭目二尺の古老小ありけ
いけ古墳ハ里人付ゆと変形ゆとすゆへ今性
来と去とふゆと形とそ原形を白けと変あり
と不悟ハとゆへとゆへ

面塚

新守郡膳田村とありと前小ゆへ伊勢と後と地名
和名吉玉とゆへ郷名と並つとけゆへゆへけ新小
麻の面天とそ塚とたふ麻とゆへゆへ面ハ今小
徳田と家富とゆへとそ谷とたふ麻とゆへとゆへ

里俗カッタイ塚ト云フハ、持田塚の誤り也
今持田の墓も古他の面を以てハ、其の
神是の是を用は例之

土産部

長穀

毎六月初日志列國時村々も雨宮へ是を納む
法例ありシガキト云ハ又サ、エガキト云ハ
今穀塚ト云ハ此ト云ハ延長或ハ法厨穀ト云
え、之も毎白月末或ハ秋上の料ハ長と云余申一

寸余穀品所々昔ハお穀ト云ハ是れト云

真珠

信濃五ノ川ハ、牛貝ハ蛤ト似テ蚌ト云ハ貝類
ト云リハ珠ト云ハ、古希有ト云ハ、西土
よりハ、玉家ト云ハ、皆ハ長崎ト云ハ、伊勢志
理ト云ハ、其ト志州安曇郡の産物ト云ハ、尾張
出珠ト云ハ、其ト云ハ、生性ト云ハ、貝ト云ハ、其ト
ハ、肥前大村の産又佳ト云ハ、伊勢ト云ハ、
其ト云ハ、伊勢ト云ハ、
其ト云ハ、其ト云ハ、
其ト云ハ、其ト云ハ、

黄海荒

上古ハ貢物トナリ今志州の島々神郡の地有
湯村ト云々其味人送る唐紙ト稱ト云

海氣腸

貢物ト云々相見ト云々其の佳品ト云々
相見ト云々其ト云々

小貝醬

鯨の一ニ寸許ナリト云々其ト云々
種別ト云々漢人ト云々鯨のト云々ハ此ト云々
形ト云々生ト云々其ト云々

鯨腸

吉川五十鈴川ノ鯨ト云々其腸ト云々其ト云々
其ト云々鯨ハ五十鈴川ト云々生ト云々其ト云々

鯨腸

其ト云々干ト云々鯨ト云々其ト云々其ト云々
ウルカト云々其ト云々

鯨

紀州熊野浦ト云々出ト云々其ト云々皮ト云々其ト云々
其ト云々其ト云々其ト云々其ト云々其ト云々
伊勢錦ト云々其ト云々

干鯨

神起き此のうへも製されとも此州無師と云ふ
出さるる皆深し〜伊勢干懸〜

輕敲

輕の懸身たる昔た〜此の二程を極上〜

籠

籠の一ニ寸許りなり此生れ〜此漬〜
上〜干た〜此田作〜
〜此漬〜
〜此漬〜

籠
イマヨレ

日本紀小久知女〜
多〜胎内の子と干堅之カラス〜
引〜此物と他國より〜
これ〜

輕重

九州の地より〜
堅め此の神〜
〜干物とむ〜
例〜

干貝

鯛類菜類

此類より鮭、鱈の類は他より来るものあり

麻尾菜

伊勢の産物にして、昔より、是れを、漬菜と云ふ。浦の産と上品と。平月、小浜の産物なり。此の類は、菜、の類なり。

稚海藻

いふ、一、貢物の一種なり。此より、昔より、此の類は、乙あり。志別、坂の産物なり。上品、價、亦、十、倍、と、あり。素和、布、灌、和、布、より、あり。和名、抄、小、述、本。

茶、の、類、なり。

陟、整

貢物、古、く、相、同、一、宮、川、下、流、砂、と、交、り、不、小、生、り、り、其、佳、し、り、り、と、度、を、取、神、崎、浦、の、産、物、也、信、じ、り、類、上、り、り。

滑、海、藻

貢物、古、く、曰、く、淡、味、の、類、也、昔、より、此、の、類、は、

神、仙、菜

初、春、よ、出、り、と、上、品、と、も、稱、上、の、一、種、也、其、も、粗、柄、と、も、

鶴冠菜

和名 櫻小土里 作加乃里 ちあき 全体 ちうらん 有
佳品 形も

海産

上古ハ食とーしー今工人日利と中りーし他
へ送る中々

於期菜

和名 秋ふろーしー 冬春食とーしー 粗物

葉菜

宮川の上河 保村 ちう出 成上品 ちう上品

有徳大 君 紀列 ちう法 ちう時 ちう地 の葉を愛

たまひ 秋上 ちうちう ちうちう 世ノ川上 菜と

てちう ちう ちう 保石ハ 飯子 秋ふ ちう 権田川の上

干瓢

宮川の下 方向 村 ちう出 ちう上品 ちう六月 土用
中 小製 ちうと 土用 剥 ちうて 葉と ちう生 斤 ちう 枇杷
ちうちう ちう ちう ちう ちう ちう ちう ちう

果蔬

柿 種類 ちうちう ちう 甘美 形も 又 宮川の上 ちう 半材
ちう ちう ちう ちう ちう ちう ちう ちう ちう ちう

凡又日取形言川の下方龍村上赤村の産と稱
且之西丸と又無

氷餅

相熊岳より言中製と稱し法亦詳
輕粉

村和村下村川と云
つのはとてつてつて
和屋野野之介と云
小白粉と製せ

伊智ハラヤ白粉と云ふ氣形相下村と出せ
氷浪と製し藥物と要し客師の具と云
昔ハ村和村の辺と氷銀と云ふ
沙清

万金丹

諸國小善と云ふ相熊岳所同産の薬注之頃日
受領し所同國情極と云ふ山田妙具所出
産あり

小西万金丹

山田八日市場より享保年中小西大和太極
主領より家法と法多因と云ふ小思法飛薬と万
金丹と云ふ能く好む

神仙丸

神仙解毒丸と云ふ大志市家の良方候と云ふ
と云ふ丸と云ふ能く好む

伊勢曆

諸國の祈禱大庭の法を以て成ると云はれり
好と由身同なり神祇の意天下泰平五穀成
と云ふ祈りまれば程々一枯つたの時候と農家
よきと云ふ母とたり一と云ふ一と云ふ例
と云ふ大庭の法一運と云ふと云ふ一と云ふ
云ふと祈禱の難と云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふ

伊勢橋

天師の橋と海
松橋と云ふと云ふ

多氣郡丹生村丹生神社の境内に橋の古本あり

丹生に在りては
村名を以て名に
なり

幾百と云はれり
是れ美り今諸國に
は橋とて別と云ふ
と云ふ

伊勢桜

は花淡紅にして八重なり
伊勢の桜は桜の本なり
と云ふ

菅笠

菅笠村にて数多他國へ
と云ふ

田々々々々々

竹皮籠

山田小比良工多し本櫃狹呂葛籠の敷き上品と
價も京江戸より倍多し

河崎庵下

山田河崎小比良工多し此類と似るも倍小
玉折りしと粗なりしと丹性ししと地由小好
し

釘

大漆小比良工多し漆針ししその形もこし地小

こし水

瓦

土の性向密しし下能焼く故水氣を食むこし厚
しし

楠部土

楠部村より出る色赤黒なりハフスベ土とも
以て白くあり砂を食と海産物掛壁の上あり
小月石をこり葉人まうもの好むとしうり
用ひて今ハ他々にも送る

炭

高田紀伊領より吉川と下へ田舎に積り熊野炭
より

漆器

本春日光山より出た漆器にて白く堅く
あり他國へ送る

塗箸

竹箸をとりて諸國に土産として
未嘗人の手
と

糖

品本町よりの上上物にして
品高敷りて他國へ

送る

茶

品一足袋諸國に土産として
紹興茶として
教書に
の類は

紙たばこ

品一箱より出た紙たばこ
他國に土産として
世人より
紙

本修信

品一箱より出た本修信
本修信の類は
品一箱より出た本修信
本修信の類は
品一箱より出た本修信
本修信の類は

青色を鉄目ハ白紙水子早任思女といへし連
小字を量と希とん存之

附録

奇異

両宮中小あわてて一釋りし事ありといぬる雨
降る是を法光の雨といふされと希ふハ妙りさ
るゆゑと云ふ取子又ゆゑあわて又妙なるは連雨
これ切らぬハ長官家より下知て宮山狩
ゆゑの御守りさしあつて必釋おとるるらるは
そへて神祇の古法神奇に依て信作さるるは
禁さるる

宝永二年百四月上旬よりオカゲまわるといふ

事ありて、高宮人群集し、九四十五日、此間、三百
六十二万人、云、庭へ、飾へ、末代の記録、ふ載きて、後
神皇純二考、ふ著きて、神代のく、ら、怪事、あり、怪
む、記、し、といひ、し、く、主、皇、年、中、十一月、山、田、大、寺、を
て、宮、川、の、側、に、同、の、山、七、倉、小、屋、を、て、焼、き、き、を
ま、く、主、皇、年、主、十月、大、地、震、を、て、人、亦、と、流、し、し、將
浦、二、見、浦、の、辺、洪、波、を、て、莫、小、世、界、も、崩、れ、し、り、如
し、大、坂、兵、隊、の、辺、も、千、如、く、又、高、山、焼、て、居、を、焼、き
し、怖、し、き、天、災、なり、き、

每十一月十五日の夜、子、刻、古、湊、二、見、浦、の、沖、に

千、下、野、々、陸、路、と、な、り、て、修、行、し、既、一、夜、を、し、た、也、
と、接、し、し、り、し、是、と、七、汐、日、と、い、ひ、七、里、あり、し、水
の、三、河、國、へ、歩、行、し、し、り、し、も、し、り、し、も、松、州、境、の、浦
に、泊、り、し、し、り、異、し、し、り、地、形、ふ、し、り、し、り、時、候、の、違
違、月、は、大、小、も、相、り、し、し、り、は、表、の、し、り、浪、り、し、り、と
奇、形、也、

武、年、千、も、信、て、又、し、り、人、の、し、り、し、り、し、り、と、あり、し、り、
表、の、千、波、々、を、ふ、掃、り、し、り、と、す、つ、り、し、り、む、奇、也、
寶、永、正、徳、の、以、伊、勢、の、誓、切、し、り、し、り、怪、事、あり、し、り、奥、女
は、應、腫、と、し、り、と、誓、の、結、締、し、り、し、り、切、筋、を、し、り、根、金、行、来

と念して自若く其に養生圖して熊支松やりの
家業もつてもとてやと伺へも常々農作のこゝろ
居上り宅を喜ぶおふとつてまゝにねん小
川ありされともは師易書も家業を伝ふ
ゆとつて子後ハ何の病もなしとま

け怪矣病なりと正付女同ふとくうて或日今
既九州ふこはあり病余らハ是のりともな
き居上り宅ありと二三りとおつて親族た小
つて竿取の振飯とくつてけかへおろす
病去つたまゝとおのつて下り常のふとつて

正付の領事令

寛延二年己八月十二日上は井社の北に出る者
もと陸部をえとて人衆もなつて大氣のあつてま
而しありは商人孫甘ふとつて一の桶とて煙のこ
まのあつてつての煙もふハ此を古老の云は頃日
は連由は棒紐の粘温動ふ好して法をとま
をけなりとて
紀前國土島盛具も梅善和尙志業のうら江戸駒
込若祥さふおき技方ハ業店ハ休とつておし
勢二十人祥の士出物ふらつて小信ハ行國ハ

形や同へて亦くはめと清くは彼士吾女を以
て戸小連りてして勢州園の驛へて傳へて小信
云吾ハ是くは素言の志あり是よりはは素言に奉
へて言く謝して別とんといひ法士の心は方余
言ハは後小信へてしては是言小信へてして然
るしては是言小信へてしては是言小信へてして然
小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
余との驛小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
て是山田は市中川傍の辺を託神して是別告日
へ海海を以て是別告日へては是言小信へてしては是言小信へてして然

うそきしては素言の心へ余の心へ是別告日へては是言小信へてしては是言小信へてして然
は是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
飢を清くは是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
き小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
又余を清くは是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
別且ては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
僧余言ハは是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
て是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
きは是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然
い而して法士曰く是法能くは是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてしては是言小信へてして然

そこの怖く来音の改路のハ是名も来言も
此度の神皇御代に於ては伊勢の信仰を以て元文
年中にも来言して生岳の嶺を中りと取ひその
由路も亦亦来言して五馬を下りて七十八歳にて
終るま

此信と予親とと語らひて、俗姓ハ武川にて
信中の彦形もも、浅野家 播州赤松の御代 の義士武
林唯七と侍の婿をなすなり、然るも予もと
るも奇怪と好まされハ目の何れも又は

二と學ぶ能くあり
雑話

古傳に據る今と云ふもの、今の昔と云ふも如し、漸
二十年の遷延と云ふも、今も別世界の如し、延宝
天和は頃々も、伊勢中町と吳名と、高取の妻
女 山田一志町 松原松原松原と好く嗜み、一男も
いり、その時、とき、い、と、人々、小達、も、
或る時は、女、白、交、り、梅、の、美、り、き、と、又、て
磯、桐、村、の、い、れ、り、小、橋、本、小、油、の、梅、の、花、今、と、ま
る、と、ま、り、と、ぬ、い、ち、と、詠、る、今、壯、年、の、ま、は、

けね歌解くはまはし順神の丸信接小袖
とつの中人之下婦人の乳膝なりき手製四五
寸或は一尺たゞその結裁縹々編緞の類と縫結
て其敷直と上品と女を享保の頃まで老
女を持信くはとて其造りもはまはし見女
は徒えてあつたは毎事今と知て昔と知
さうは信と知くは

享保の初うはまはし神の異うはまはし
他出ありは必老尼と信是より是と尼貞比
五尼と信はまはし女性途中に於ては

・まはし神とけ尼貞よりはまはし
は老女中は局女信は代て其造りもはまはし
まはし信と知くは

者と希形
夏田長右衛門より師匠家山田信根田家より
今ハ家信とも信くはまはし縫匠なりと因洗匠梅
川の宮極方と信堂土方は師長信の信局とも
大庭と信はまはし信の一代つは信極や文
通と文はまはし信は信信は信信は信信は信
信は信は信は信は信は信は信は信は信は信

市位とゆへ

武系傳小伝の理解と評して云へる元々其法外
は山傳福小乃と云ふまゝに倭小を以てハ婦人
思女人と對し極ハるゝも後ハ及んと云へる
人物ハ唯後祿と唱へる事とハハワラハ
なくおウーきまふおひーる應州公の右師楮
叟を丈とす極ハ書ハ今小松平安應守後祿
番人ハ中楮叟を丈と書ハ其後祿多ハ
らの丈と云て神形ハ池と号ハ極其ハ
おとつー

或回家小金子借状の古き紙付つるに形小金子
何ハ借用中交玉返信書師ハありてハ我本人
下方名義ハ仍ハ件と書ハ又小金を以て廣大の
田畑と書買ハる四至境ハ一戸不足ハ其地の
数今の人依継ハ袖と為ハる
神形の古凡女の髪と湯備の切つて包こしハ
いふなりハ形ハ昔ハ今ハおとこの女ハ髪小
結ハ結ゆと書保の初つゝハ山田の市中小
まハ家唯一ニ家ありて膏藥のみハ
下扱ハる頃日ハ油小清ハる境義ハ行ハる

ふくろの針さくし男は袖い丈素袍も等しく女
の帯は衣袂の量目と重しこれハ徒然草も
考れ冠糸も今ハ徒然草と何れハ凡俗の情愛
ハ古今等しくそのや

宮川衣冠集五巻考攷

泰盛利著者宮川衣冠集五巻の室曆を其は
〜〜小字柄なると吾又言神皇正統記のつよ〜〜
去ぬ〜むとてめひてこの考〜〜何〜を
も福の〜削〜もな〜ひ〜も年序と好
ふまふ〜〜足は小遠〜もあ〜〜色たる
事未さにか〜れハあ〜〜それと又は尊
神さ〜神〜〜信位と〜〜〜〜
服〜〜のあま〜おのづ〜も唐〜〜及〜母
な〜〜とぬ〜〜ひ〜お〜〜い〜な〜
中は書のお〜〜ら〜お〜〜ら〜お〜〜ら〜

と修へおうんも本の出まきもなまゝと古くも
 法主あし誘つゝまうせとてそやう〜心だたこ
 一その謬もあ〜と西〜ま〜落〜も補い
 てそれよるを我い〜も〜又〜〜結〜てふ
 うよとのす〜知りつ〜書つけつされもあ〜
 小形〜ま〜〜神形〜〜今回これと西中
 せうや云ふ

安永二癸巳年八月

権禪直任四位下度會神主正董

